

博物館だより

1991.8
第6号

大津市歴史博物館

企画展

「庶民のいのり 近江の絵馬」を開催

8月31日～9月15日



海津天神社 繫馬図(県指定)

学業上達・入学祈願・家内安全・安産祈願等々、いろいろな願いをこめて奉納する絵馬の習俗は、ますます盛んになっています。我々に身近な絵馬ですが、さてその歴史は、その変遷は、どういうものだったのでしょうか。

絵馬は文字どおり板に馬を描いたものが本来の姿でした。つまり絵馬の発生は、馬への信仰があったうえに生まれたのです。古来馬は、人の力を超えた能力を持つものとして神聖視され、生馬を神に献上することが多くありました。しかし、高価な生馬の献上ができないものが、板に馬の絵を描き神に納めた、このことから絵馬が生まれたと考えられています。

時代が移り近世頃になると、絵馬は大型化し、画題も様々のものが描かれるようになります。人々の集う社寺には、著名な絵師が筆を揮った大絵馬が奉納され、参詣者の目を楽せました。大津では、園城寺観音堂・石山寺などにこうした絵馬が数多く残されています。

一方、現在の絵馬に通じる、祈願のための小絵馬奉納も盛んに行われていました。

本展では、古代から見られる絵馬の歴史を追いながら、近江に残る大絵馬の数々、人々が祈りを込めて納めた小絵馬など、総数二百点余りを展示します。一つ一つの絵馬に込められた祈りは、様々です。じっくりその絵柄を見ていただくと、当時の人々の声が聞こえてくるかもしれません。

なお、会期中の九月七日(土)当館講堂において、絵馬研究の第一人者である、岩井宏実先生(国立歴史民俗博物館教授)の講演会を開催いたします。また、九月十四日(土)列品解説を、当館学芸員が行います。

企画展の概要

企画展の概要と主な展示資料は、次の通りです。

(1) 絵馬の起源

発掘調査で発見された奈良時代の絵馬や、絵馬と同じように生馬の代わりに奉納された木造神馬、中世の紀年銘をもつ絵馬など、古代・中世の絵馬の歴史を紹介します。

(主な展示資料)

・野洲町御上神社所蔵木造神馬

(2) 近江の大絵馬

近江の社寺には、様々な画題の見事な大絵馬が多数残されています。馬をはじめ、船・武者・近江八景など、美術的にも資料的にも貴重なものばかりです。県内に数多い絵馬のなかの主なものを紹介します。

(主な展示資料)

・県指定文化財 マキノ町海津天神社所蔵繫馬図絵馬

・市指定文化財 大津市佐久奈度神社所蔵騎馬図絵馬

・園城寺所蔵 渡辺綱鬼退治図絵馬

(3) 小絵馬のいろいろ

手帳に人々が奉納した小絵馬には、生活感覚あふれるユーモラスな図柄が多数あります。近江に残る小絵馬とともに、こうした図柄の数々も紹介します。

(4) 祭りのなかの絵馬

祈願に奉納される絵馬の他、伝統的な行事の中で用いられる絵馬もあります。少し感じの異なる、行事のなかの絵馬を紹介します。

「火の贈りもの」展終わる



平成三年四月二十七日から五月二十六日まで、大津市歴史博物館の第二回企画展として「火の贈りもの」国づくりを支えた古代人の技術」を開催しました。一般公開に先立つ四月二十六日企画展に関係した市内の方々の約六〇名を迎えて、開場式を行いました。主催者を代表して、山田豊三郎大津市長が「大津は古代から、生産遺跡が多く存在しており、その製品も

想像以上に優れた技術で精巧なものが多かった。大津における古代の生産技術の水準がいかに優れていたかを知る良い機会です。」とあいさつし、市長をはじめとし、副議長など三人でのテープカットがありました。観賞を終った人達は、古代人の技術の素晴らしさ、製品の精巧さなどに魅了されていました。

本展は、わが国の古代の生産遺跡に関係した資料の中から六九件約四五〇点を全国的に集めたもので、古代人の技術がどのようなものであったのか、どのような製品が作られていたのか、それらが当時の社会に対してどのような影響をあたえたのか、ということを探ろうとしました。展覧会には、大津市、滋賀県内は言うに及ばず近畿地方の各府県や遠く山口県や東京からの観覧者も迎えることが出来ました。会期中の観覧者は五、六〇一人でした。

「大津と大津事件」展報告

本年は、明治二十四年（一八九一）に日本全体を揺るがせた大津事件の発生からちょうど一〇〇周年にあたることから、大津事件一〇〇周年特別コーナー展として「大津と大津事件」展を開催しました。会期は事件発生の五月十一日より同月二十四日までの二週間で、場所は企画展示室Bを使用（入場無料）。出展資料件数は、写真パネル三三三点、実物資料一四四点、イラスト二点、会期中の総観覧者数は四、一六一人でした。

本展は、大津事件を司法権の独立という観点からではなく、事件の舞台となった大津での状況、地元の人々に対する反響などを明らかにすることに主眼をおいた



ほかに、このような時宜にかなった題材で特別コーナー展を開催したのは初めての経験であったわけですがこれからも市民をはじめとする来館者の方々の興味を引くようなコーナー展を随時開催し、話題を提供していきたいと思えます。最後になりましたが、あらためてこの「大津と大津事件」展に御協力いただいた方々に感謝申しあげ、報告にかえさせていただきます。

収蔵品紹介⑤

永楽保全作 膳所焼一重口水指 江戸時代

高さ一六・七センチ

膳所焼は、元和七年（一六二一）に膳所城主となつた菅沼織部正定芳がお庭焼（藩の御用窯）として始めたものと伝えられ、江戸時代初期の大名茶人で、將軍家の茶道師範をつとめた小堀遠州（遠江守政一）の七窯の一つといわれた。

黒味をおびた鉄釉の美しさは、茶道の侘び、さびに通じるためか、茶道の世界で広く用いられ、茶入、水指、香合などの作品が伝わっている。

この水指は、膳所焼特有の鉄釉を上辺から四分の三まで付け、さらに、釉の濃淡により変化をもたせている。形式上は、口を一重にしたいわゆる一重口の水指で、全体的には、円筒形をしているが、へらによって竹のありさまを簡素に表現している。蓋には、真塗りのものが付けられている。

また、水指の納められた共箱には、「河濱支流」の黒印と「善五郎造」の箱書が記されている。このことから、この水指は、江戸時代初期の膳所焼ではなく、後世、京焼の名工として知られる、永楽保全（西村善五郎）が作陶したものであることがわかる。

永楽保全は、寛政七年（一七九五）、京都の織屋に生まれたという。十二・三歳の頃、千家十職の一であった京焼の西村善五郎家（十代目・了全）の養子となつた。

文化十四年（一八一七）、二十二歳の時に西村家を相

続し、中国の陶磁器を写した金欄手の手法などで名声を得た。文政十年（一八二七）紀州徳川家のお庭焼に参加して、その功で「河濱支流」と「永楽」と名乗ることを許された。

しかし、晩年は不遇であった。息子の和全と不和となつて嘉永三年（一八五〇）を去つて江戸へ行き、翌年江戸から戻る途中、大津に立ち寄つた。

大津では、円満院門跡の後援で作陶を行うこととなり、こうして「三井御浜焼」がはじめられたが、期間は短かった。その後、同七年（一八五四）の秋に六十歳で生涯を終えた。

この間、膳所に「河濱焼」の窯を開いて作陶をしたという伝えがある。しかし、この時期膳所において、この水指を作陶したかどうかは定かではない。「河濱支流」の印や「善五郎造」の墨書から、息子の和全に善五郎の名を継がせた天保四年（一八三三）頃までの作と考えられる。



八月・九月の土曜講座

歴史博物館の「土曜講座」の八月・九月の日程は、次のとおりです。

◇体験講座「古代の火のおこし方」

(日程) 八月二十四日 午後二時～三時三〇分

(講師) 財団法人滋賀県文化財保護協会主任技師 奈良俊哉氏

(定員) 三〇名。対象は、小学生、中学生に限りま

(内容) 古代の火おこし道具をつくり、それを使っ

て火おこしの実験を行います。

◇特別講座「大津絵のこころ」

(日時) 八月二十五日 午後二時～三時三〇分

(講師) 大津絵師四代目松山(高橋松山)氏

(定員) 一三〇名

(内容) 大津に生まれた民画「大津絵」について、その題材や意味などをスライドをまじえて考えます。

◇「古文書を読む」

(日時) 九月二十一日、二十八日、十月五日

午後二時～三時三〇分

(定員) 三〇名。常設展示の古文書を解説。講師は、

本館学芸員。

受講ご希望の方は、ハガキに住所・氏名・年齢・電話番号を記入し、大津市歴史博物館までお申込みください。申込切は、「古代の火のおこし方」・「大津絵のこころ」が八月一〇日、「古文書を読む」が九月一〇日(多数の場合は抽選)。

博物館日記抄

平成3年3月
平成3年7月

- 3月1日 原田大阪高等裁判所長官来館
- 9日 土曜講座(古文書で読む大津の歴史Ⅰ)開
- 14日 西川幸治京都大学教授・森谷尅久武庫川女子大学教授来館
- 16日 土曜講座(スライドで見る大津の遺跡Ⅲ)
- 17日 粟津湖底遺跡発掘中間報告会開かれる、収蔵庫燻蒸(二十日まで)
- 23日 土曜講座(古文書で読む大津の歴史Ⅲ)開
- 26日 県博物館協議会研修会開かれる。石山寺資料調査。四日市市・藤沢市各教育委員会一行来館。
- 27日 宮崎市教育委員会・水口町歴史民俗資料館来館
- 29日 顧問会議開催
- 4月2日 近藤功滋賀銀行専務・土山成義しがけいぶん社長来館
- 10日 宇佐美龍一東京大学名誉教授・田付源太郎彦根城博物館次長・今津町史編さん室一行来館
- 12日 名古屋市立博物館来館
- 13日 土曜講座(仏像の見方Ⅰ、定員一〇〇人に三三三人の応募)開く
- 17日 県教委文化施設開設準備室一行来館
- 18日 古屋彰司東京美術編集長・林弘和県立琵琶湖文化館長来館
- 20日 土曜講座(仏像の見方Ⅱ)
- 24日 県公共図書館協議会研修会開かれる
- 26日 第二回企画展「火の贈りもの」因づくりを

支えた古代人の技術」開場式およびレセプションを開く

27日 企画展一般公開「土曜講座(古文書で読む大津の歴史Ⅰ)」開く

5月11日 特別コーナー「大津と大津事件」展開場、企画展記念講演会(小笠原好彦滋賀大学教授)を開催

12日 企画展記念講演会(田中琢奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長)開く

18日 土曜講座(古文書で読む大津の歴史Ⅱ)

25日 土曜講座(古文書で読む大津の歴史Ⅲ)開く、林屋辰三郎顧問来館

26日 企画展および大津と大津事件展を開幕

6月6日 重富滋子根津美術館学芸員・井ノ口善夫県レイカディア振興財団専務来館

8日 本年度第一回ふるさと大津歴史教室(粟津湖底遺跡と水墨画の世界)を実施

14日 灰野昭郎京都国立博物館普及室長ら来館

15日 土曜講座(社寺建築の見方Ⅰ)

22日 土曜講座(社寺建築の見方Ⅱ)

29日 第二回歴史教室(膳所焼と記念寺)

7月2日 ビデオシアター「大津の四季」に変わる

5日 第四十二回大津市美術展はじまる(十一日まで)

6日 第三回歴史教室(近江大津宮跡と南滋賀町廃寺跡)を実施

11日 県歯科医師会一行来館

博物館だより 第6号

発行日 平成三年八月一〇日

編集 大津市歴史博物館

発行所 大津市御陵町二二

大津市歴史博物館

電話(〇七七五)二二二〇〇代